

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00040

研究課題名（和文）20世紀における進化思想と倫理学の関係および現代の論争状況の研究

研究課題名（英文）The study of the relation between theory of evolution and ethics in 20th century

研究代表者

児玉 聡（Kodama, Satoshi）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80372366

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「20世紀における進化思想が倫理学に及ぼした影響、及び、現代において進化論と倫理学のあるべき関係」をめぐる問いについて研究するものである。

研究実施期間を通じて、R.ドーキンスの『利他的な遺伝子』の精読を行い、進化倫理学の祖であるH.スペンサーの学説を詳細に検討した。また、社会生物学論争について、E.O.ウィルソンの『社会生物学』を中心に関係著作を検討した。その結果、「進化倫理的実在論」というメタ倫理学上の立場や、「暴露論証」と呼ばれる議論の再検討の必要性を明らかにした。さらに、いわゆる「ヒューマニズム運動」の哲学的分析が、進化論と倫理学の関係を考える際に重要であると結論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、進化論と倫理学の紆余曲折のある関係について、これまで十分明らかでなかったその歴史および両者のあるべき関係が明確になると考えられ、また哲学者と生物学者との間対話を実りあるものとするという点で、高い学術的意義を持っていると言える。

研究成果の概要（英文）：This research program aimed to examine the effect the theory of evolution had to the ethics and consider the good relationship we should have between them. Through this program, we overviewed comprehensively the developments of the theory of evolution from H. Spencer to R. Dawkins and we surveyed in detail the topics about sociobiology debated by such specialists as E. O. Wilson, J. Mackie and M. Midgley. We concluded that we should discuss precisely the correlation of the evolutionary theory with certain types of argument in metaethics, especially the metaethical 'anti-realism', and we ought to reconsider whether the 'debunking argument' is robust in a philosophical sense. In addition, we indicated that the philosophical analysis of 'humanism movement' is crucial in order to reveal the ideal relationship between the evolutionary theory and the ethics. These results were released through publishing books and research papers, and giving several conference presentations.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：進化論 倫理学 科学史 倫理想史 進化倫理学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者がこれまで行ってきた功利主義と直観主義の思想史的研究の延長線上にある。功利主義と直観主義の論争は、当時の科学にも大きな影響を受けているが、とりわけ**1859**年に公刊されたダーウィンの『種の起源』は、スペンサーの進化論に基づく功利主義理論の構築のように、倫理学全体に大きな影響をもたらすものであった。とはいえ、ミルやシジウィックは進化論が道徳に対して持つ意義をあまり評価せず、その後もムーア以降のメタ倫理学の動きや、社会ダーウィニズムや優生学といった進化論の「誤用」とも言うべき社会現象もあり、進化論と倫理学の関係は十分に検討されずに来たとと言える。

しかし、社会生物学以降、脳神経科学に裏付けられた道徳心理学の発展に伴い、近年では功利主義者のシンガーを始め、進化論を倫理学の理論構築に使おうとする研究者も多い。さらに、最近のゲノム編集などの遺伝子改変技術の発展に伴い、ますます進化論の「哲学的含意」が問われるようになってきている。このような哲学的潮流のもと、スコット・ジェームズ著『進化倫理学入門』(2011)や太田紘史編『モラル・サイコロジー 心と行動から探る倫理学』(2016)といった、重要著作の出版が国内外で相次いでいる。しかしながら、これらの研究においては、現代の最新の研究に注目するものの、過去の哲学的議論の蓄積が十分に活かされていない状況である。

また、進化論と倫理学の歴史を扱った研究としては、ダーウィンの時代からの進化倫理学の歴史を扱った **Paul Lawrence Farber** の *The Temptations of Evolutionary Ethics* (1994) が先駆的な研究として参考になるが、概説に留まっており規範倫理的あるいはメタ倫理的な分析は弱く、また、霊長類学や脳科学等の研究が大きく発展した **1990** 年以降の議論の展開を当然ながらカバーしていないため、新たな研究が望まれてきた。

以上のような背景に基づき、進化論と倫理学の関係を広く通史的に扱いながらも、精緻な倫理学的分析を施す包括的研究が必要だと考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、「**20** 世紀における進化思想が倫理学に及ぼした影響はどのようなものか、また、現代において進化論と倫理学のあるべき関係はどのようなものか」という問いについて研究を行ない、他分野の研究者にもアクセス可能な基本文献を作成することである。

3. 研究の方法

本研究では、いわゆる「進化論の現代的総合」すなわち、ダーウィンの自然選択説とメンデル遺伝学の結合による生物学の諸分野の統合の前夜を出発点として、**20** 世紀以降の進化論の発展を踏まえつつ、現代に至るまでの進化論に影響を受けた倫理思想の批判的検討を行なった。本研究は主として文献研究に基づくが、適宜国内外の関連領域の研究者と意見交換を行ないながら、国際的研究として遂行した。

4. 研究成果

本研究実施期間を通じて、**R. ドーキンス** の『利他的な遺伝子』及び、ケアの倫理への進化論の影響を検討した **Nel Noddings** の *The Maternal Factor* の精読を行い、また、進化倫理学の祖である **H. スペンサー** の学説を詳細に検討した。さらに、社会生物学論争について、**E.O. ウィルソン** の『社会生物学』を中心に、これに関連する **ジョン・マッキー**、**メアリ・ミジリー**、**ピーター・シンガー** らの哲学者の思想および関連する著作を子細に検討した。

その結果、以下のことが判明した。

(1) 科学哲学者の **マイケル・ルース** や **リチャード・ジョイス** らを中心として主張された「進化倫理的現実論」というメタ倫理学上の立場の背景には、**ジョン・マッキー** が主張したメタ倫理学に関する錯誤説 (**error theory**) の影響が極めて強いということを明らかにした。

(2) **ピーター・シンガー** が **2005** 年に公刊した **Ethics and Intuitions** という論文の中で提示したことで大きな注目を集めることとなった「暴露論証」という議論とは、近年では、**ジョシュア・グリーン** の『モラル・トライブズ』(2013)の中で取り上げ直され、より洗練されるに至った。この議論とは、**fMRI** などを用いた脳神経科学に依拠することで、進化論功利主義以外の規範理論のもっともらしさが損なわれることになると主張する議論であるが、本研究では、この議論に関して、シンガーやグリーンの上記の著作だけでなく、シンガーが **1980** 年代に出版した *The Expanding Circle* (1981) において展開している古典的な議論にも遡りながら、このような「暴露論証」と呼ばれる議論の構造とその背景について仔細に検討した。その結果、「暴露論証」とは、功利主義と直観主義の間の **19** 世から続く歴史的論争の一つとして位置づけなおされるべきである、ということを確認した。

(3)E.O. ウィルソンの「社会生物学」を嚆矢とする、進化論という生物学的知見に基づき、宗教に基づかない倫理的な生き方の提示する「ヒューマンイズム運動」は、時に、性別役割分担や性差別を生物学的に正当化しようという点、及び、社会ダーウィニズムや優生学を導きかねないという点で、確かにその「誤用」には十分注意する必要がある。本研究では、この「ヒューマンイズム運動」について E. O. ウィルソンやジュリアン・ハクスリーの著作を検討し詳細な分析を加えることを通じて、それが持ちうる現代的な意義について検討し、現代の「人生の意味」をめぐる哲学的議論において、この思想的潮流が周辺的な位置づけしか与えられていないという状況を明らかにしつつ、この思想的潮流は現代の「人生の意味」を巡る哲学的議論の中においても重要な位置づけを持ちうる、ということを示した。

以上の研究は、ジュリアン・ハクスリーやリチャード・ドーキンスを代表とする進化論の研究者による倫理思想、および彼らの思想に触発を受けたジョン・マッキー、メアリ・ミジリー、ピーター・シンガーらの哲学者の倫理思想を詳細に検討したものであり、倫理(学)に対する科学者の見方の典型を明らかにし、また翻って、生物学(科学)に対する哲学・倫理学者の応答の典型を明らかにすることに成功したと評価される。このように、本研究は、哲学・倫理学と経験科学の間で取り結びうる望ましい関係の一つを明らかにしたという点で、専門特化した研究に陥りがちな学問的潮流において、その学際的な研究の可能性を指摘するという極めて高い学術的な価値を持っていると言える。また、進化論と倫理学に関する諸問題を概説的にサーベイした、スコット・ジェイムズによる『進化倫理学入門』(2011)においても、本研究が遂行したような、19世紀からの思想的潮流から現代の進化倫理学や脳神経倫理学を考察し直すという作業はなされておらず、また、この分野の先駆的研究として評価の高い、Farber の *The Temptations of Evolutionary Ethics* (1994)も、近年の規範倫理学・メタ倫理学の議論まではカバーしていないことを踏まえるならば、世界的にみても、本研究が持つ哲学・倫理学に対する貢献は極めて大きいと評価しうるだろう。

なお、本研究実施期間中にコロナ禍が生じたため、外国人研究者を国内に招聘することはできなかったが、2019年度に英国オックスフォード大学に滞在し、同大学の研究者と進化論と倫理学に関する論争に関して意見交換する機会を得ることができた。

以上の成果の一部は、『実践・倫理学』(勁草書房、2020年)という書籍や、「スペンサーの進化倫理学の検討」(『哲学研究』603号2018年)という論文にて既に公表することができた。さらに、ゲノム編集を含めた最新の生物学と倫理学の関係については、2020年1月にスイスにおいて開催された国際ワークショップにおいて、**Germ-line gene editing and the child's right to an open future. Experimenting on Future Children: Gene editing in human reproduction** というタイトルで、既に国際的に公表することができた。そして、本研究をまとめた成果は、単著として、近年中に日本語で刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kodama Satoshi	4. 巻 -
2. 論文標題 Bentham's Distinction between Law and Morality and Its Contemporary Significance	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Revue d'etudes benthamiennes	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/etudes-benthamiennes.6378	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 児玉聡	4. 巻 72
2. 論文標題 「思考実験」とは何か -新科目「公共」でどう扱えばよいか-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 数研AGORA	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 児玉聡	4. 巻 263
2. 論文標題 ピーター・シンガーの援助義務論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 -Synodos	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 児玉聡	4. 巻 603
2. 論文標題 スペンサーの進化倫理学の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉聡	4. 巻 47
2. 論文標題 誰の幸福のために? ヒト胚のゲノム編集をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界思想	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Satoshi Kodama
2. 発表標題 Germ-line gene editing and the child's right to an open future, 'Experimenting on Future Children: Gene editing in human reproduction
3. 学会等名 Workshop at Brocher Foundation Geneva (Switzerland), 16 January 2020. (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 児玉聡
2. 発表標題 社会生物学再訪
3. 学会等名 京都生命倫理研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 児玉聡
2. 発表標題 ウイルスゲノム解析を用いた疫学研究の倫理とガバナンス
3. 学会等名 2020年度第4回「ヒトゲノム研究倫理を考える会」ウェビナー「パンデミック・ゲノム研究の倫理を考える」(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 児玉 聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 実践・倫理学	

1. 著者名 宇佐美 誠、児玉 聡、井上 彰、松元 雅和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 294
3. 書名 正義論	

1. 著者名 ピーター・シンガー、児玉 聡	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 136
3. 書名 飢えと豊かさと道徳	

1. 著者名 児玉 聡、奥田 太郎、後藤 励、亀本 洋、井上 達夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 信山社出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 タバコ吸ってもいいですか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The 11th Internatioal Conferrence on Applied Ethics	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------